関西自然保護機構会報 14(2)：129－130，1993

友人へ，カワウのコロニーを見てきた感想

黒　沢　　孝
（NACS－J・自然観察指導員）

琵琶湖・竹生島の見学から帰って，友人にメッセージを送りました。それはネットワーク通信に書き込みをしたものですから，不特定多数に向けての手紙だともいえるでしょう。3件に手を少し加えて，わたしの感想にします。

＊　＊　＊　＊　＊

■「自然」に関心を寄せる友人へ（92.11.4）

昨年の夏の終わりごろから，大繁殖で話題にしていた琵琶湖・竹生島のカワウのことです。11月1日，竹生島でカワウのコロニーを見学してきましたので，感想，伝聞などの断片を書いてみます。

見たり聞いたりして，最初に思ったことは，今年の夏前から，やっとカワウ情報が関係者間で共有できる状態に近づいてきたようだ，ということです。去年の新聞記事に，この冬はカワウが減った，というようなものがありましたが，カワウの生態がよく分かっていたら，別の書き方になっていただろうと思ったりしました。

わたしなんぞ，竹生島へ行けば，いつでも，カワウの大群が見られるものと思い込んでいました。上陸してみると，カワウは留守でした。10月ごろからあちこちへ散って行くのだそうで，いまは，湖岸や琵琶湖に注ぎ込んでいる川沿いにいるそうです。

情報が不十分だと手探りにならざるを得なかったということなんでしょうか。今年の夏までにとられた対策に，チグハグな面もあったようです。たとえば，琵琶湖漁業（アユ漁，定地網漁など）にカワウの害が及んでいるというので，550羽撃ち落としたそうです。カワウが真犯人かどうかの確認がなかったと聞きました。その後，カワウの腹をさばいてみたことはあったものの，それも6羽だけで，腹の中にアユは少なく，ブラックバスが多かった。などなどを伝聞しました。

竹生島には約600の巣があり，ほかに伊崎（琵琶湖中ほど東岸の岬）にもコロニーがあって，約350の巣が確認されているそうです。来年の滋賀県のカワウ対策は，巣に帰ってくる2月までに，現在の営巣範囲が拡大しない範囲で巣を落とす，と聞きました。

これから先，琵琶湖のカワウがどのようになるか，わたしには分かりません。法的な待遇は，カワウにとって決して幸せなものではないようです。人間との共存の方策が見つかることを期待します。

竹生島の頂上付近にある，貴重なタブノキの林がカワウのフンで立ち枯れになっている光景はショックでした。

■鳥の好きな友人へ（92.11.4）

夏からの約束があって，11月1日のバードソンでの鳥見はお預けでした。当日は，琵琶湖の竹生島へカワウのコロニーを尋ねたのです。

そのとき入手した資料のなかに，琵琶湖の南湖（大橋より南側）で越冬する水鳥の数の推移をグラフにしたものがありました。興味を感じた部分を文章にしますと，次のようになります。

73年から82年までは傾向的な変化は見られず，88年，89年に大きな変化がありました（83－87年のデータ記入なし）。というのは，カイツブリは82年まで約700から約800羽認められたものが，88

年，89年には約300羽に減っています。これと対照的なカーブを描いているのがカワウです。82年にわずかな数だったのに，88年に約300羽，89年には400羽を超えています。

なぜ，カイツブリが減ってカワウが増えたのか，実態が正確には摑めていないと思いますが，研究者の中に，ブラックバスの繁殖とカワウの繁殖が関係あり，とみている人がいます。多分，こんな筋書きだろうと思います。ブラックバスが増え，小さな魚を食べる。小さい魚を餌にするカイツブリには，食糧不足の状態が出現する。増えるブラックバスはカワウにとって恰好の餌というわけです。ここでは，カイツブリは昔から琵琶湖に住む小魚とともに減少する側，ブラックバスとカワウが増える側という構図です。わたしはこのストーリーはあり得るな，と思いますが，あなたはどう考えますか。

■植物に関心をもっている友人へ（92.11.14）

木の匂いといえば，こんなことがありました。11月の初め，琵琶湖の竹生島へカワウのコロニーを観察に行ったとき，島の頂上にあるタブノキの匂いをかいだのです。

この島の頂上付近では，２月ごろから秋にかけて，カワウが雛を生み育てます。その強い酸性のフンのために，貴重なタブ林の枯死が進んでいるのです。頂上の大きなタブノキも立ち枯れていました。あたりにはヨウシュヤマゴボウが生えていました。

この頂上のタブノキから，同行した一人の研究者が年輪のサンプルを採取していたときのことです。先端に螺旋を切った約40センチの錐状の金属棒を，樹木の中心に向かって捩じ込んでいました。肩の高さより少し下です。道具に取っ手がついていても，サンプル採取には相当な腕力が必要なように見えました。その錐状のものを突き立てたところから，水分が浮き，木の表面を伝っていました。

道具が抜かれ，長さ約20センチ・直径約５ミリほどの木片（サンプル）に鼻を近づけたときは，おどろきました。強く匂いました。思わず，「まだ，生きてる」といいました。研究者は笑っていましたけど。

タブノキはご存じのとおりクスノキ科ですよね。クスノキの葉の匂いに似ていました。これらの樹木や葉は，光合成をしなくなっても，薫ってるんですね。タブ林を失いたくないものです。

＊　＊　＊　＊　＊

カワウ見学会を振り返っているうちに，湖の周辺で生活している人たちのことが知りたいと思いました。特に，湖の水の中のことを一番よく知っている漁師，湖の水質などについて，日本で最も気配りをしているに違いない人たちが，これからの「カワウ対策」をどう考えているのだろうか，ということです。